



E L ~ オマケの短編小説集2 ~

<01> 存在の必要について

「出掛けるのか？ 珍しいじゃん」

メフィストフェレスの部屋を訪ねたアスベエルが目を丸くした。

薔薇の館の主、メフィストフェレスは出不精というより、究極の面倒くさがりだ。

そうだというのに今夜は珍しく黒く着飾って外出準備をしていた。

「うん、ちょっと人間界に遊びに行ってくるよ。直ぐ戻るから留守番を頼むね」

「人間界に？ 何でまた？」

「素人だけど私を召喚しようとしている者が居るんでね。ちょっとからかって来る」

フッフ、と笑ったメフィストは黒い衣装に身を包んで天を仰いだ。

蒼く輝く魔法陣がメフィストを包む。

やがて銀色の輝きがメフィストを囲み、眩い閃光が走るとその姿が消えた。

悪魔メフィストフェレスを召喚する人間――。

メフィストは久し振りの召喚に、単純な興味を覚えたらしかった。



酷い顔だった。

それもそのはず。中川はここ一週間、まともに眠っていなかった。

勤務先の病院は医師不足が慢性化している上に、連日の猛暑で大勢の熱中症患者を受け入れざるを得ない状況だった。

夜勤明けの体に鞭打って診察を続け、帰宅したのが午後三時。

少し眠ったと思ったら、午後八時過ぎに呼び出される。

そしてそのまま朝まで病院に缶詰なんていう日が続いたら酷い顔になるのは当然だ。

冷たい水を風呂で浴びた後、鏡の中の自分に苦笑した中川は歯を磨き始めた。風呂で歯を磨くのは結婚前からの習慣だった。

血の味が口の中に広がった。

指を口に突っ込んで鏡を覗き込むと、歯茎から出血しているのが見えた。疲れが原因だろうか。

「……」

中川は何を思ったか、血の付いた指を鏡に走らせた。

濡れた鏡に血で妙な紋様を描く。

それが終わると、中川はブツブツと何やら呟いた。

「……馬鹿げている」

フッと笑った中川がうがいをしようとした時だった。

「う、うわっ！」

突然、鏡の中にヒトの顔が浮かび上がった。それは中川自身ではなく、明らかに別人の顔だ。

白く透き通るような肌と虹のように複数の色が混在する瞳が印象的な男の顔だった。

「呼んだかい？」

鏡の中の男が言った。中川はポカンと口を開いたまま何も言えず、硬直していた。

「悪魔メフィストフェレスを召喚したのはオマエか？ これはまた、珍しい場所に召喚されたものだね」

夢か、と中川は思ったが口の中は痛い。

頬を叩いてみたが痛みは感じる。鏡の中の男は「悪魔」と言った。

「おいおい……嘘だろ？」

「何の事だい？」

中川の呟きに「悪魔」が返事をする。

「ちょ、ちょっとふざけただけだったんだよ。夏だし『呪い』の映画なんてものが流行ってるし、ちょっとふざけたつもりでネットで見た奴を鏡に描いてみただけだったんだ……」

中川が呟くと「悪魔」は嫣然と笑った。

「そうかい。でも召喚されたから私はココに来た。何か望みがあったんじゃないのか？ ふざけただけにしろ、悪魔メフィストフェレスを召喚できたんだ。何も望まない、という事はないだろう？」

映画や小説の世界の話だと思っていた事が目の前で起こり、中川は混乱した。

悪魔を召喚した、なんて医師である中川にとって非科学的過ぎて馬鹿馬鹿しい話だ。

しかし「望み」と言われてハッとした。

「俺の、望み……？」

「大抵は良くない望みだろう？ 悪魔に頼ろうとするなんて、ね」

「……望み」

中川は酷い顔を鏡に向けた。

望みはある。確かによからぬ望みだ。

中川は一年前に家を購入した。都内の新興住宅地に建つ一軒家だ。

約50軒の家々が並ぶ分譲地の中で南向きの物件を選んだ。

敷地は都内とは思えない広さで庭もあり、車を二台止められるのも魅力的だった。

看護師の若い妻と一緒に引っ越し、新しい生活をスタートさせたのは良かったが問題が起きた。

夫婦揃って病院勤め。それも夜勤もあるシフト勤務だ。生活リズムは一定でない。

昼間、帰宅して体を休めようと思った時、外が煩くてとても眠れないのだ。

住宅地には幼い子供を持つ家が多い。

朝は小学生や幼稚園児、昼は乳児を抱いて井戸端会議する女性達、夕方は帰宅後に外で遊ぶ小学生や幼稚園児、そして夜も夫の帰宅が遅いと思われる女性達が子供と一緒に道路で戯れているのだ。

興奮した子供達の叫び声、女性達の甲高い笑い声や無駄に大きな話し声、必要も無いのに鳴らされる自転車のベルの音、ボールが道路や塀に当たる音など、疲れた体には全てが堪えた。

それは中川だけでなく、妻も同じだった。

更に言えば、車通勤している二人にとって、道路に立っている人自体が邪魔な存在だった。

しかも歩き始めたばかりの幼児は車に注意する訳がないし、ボールを追い駆ける幼児は突然飛び出してくる。それらを監督しているはずの保護者達はおしゃべりに夢中で子供の危険に気付くどころか、自分達が車の邪魔になっている事さえ理解していない。

こんな事が毎日続けば、よからぬ望みを抱いても仕方がない。

「どんな望みでもいいのか？」

中川は鏡を覗き込んで尋ねた。

「構わないよ。ほんの少し、代償を貰うけどね」

「代償？」

「ああ。魂の欠片を貰う」

「.....欠片でいいのか？」

「場合によっては魂丸ごと貰うけど？」

鏡の中の「悪魔」は美しい顔に似合わない危険な光を瞳に湛えて笑った。中川にはその笑顔が魅力的に見えた。

「消して欲しいんだ」

「消す？」

「ああ。毎日毎日、道路を我が物顔で占拠して無駄に時間を使っている者達を消して欲しい。煩いし、邪魔だし、俺も妻もうんざりしているんだ。閑静な住宅街だと思っていたのに、働きもせず時間を浪費するだけの馬鹿どものお蔭で俺達夫婦は一時も休めない。あの愚か者共を消して欲しいんだ」

「愚か者共、ねえ.....」

中川の言葉に「悪魔」はクツクツと喉を鳴らして笑った。

「俺が手を下すと『犯罪』になるだろ？ ただ呪うだけなら罪にはならない。それに『悪魔に話した』なんて非科学的な事、誰も信じないだろう？ お前が俺の願いを叶えてくれれば、俺は万々歳だ」

「そうだねえ」

中川の言葉に「悪魔」は頷いた。

「解ったよ。その願い、叶えてあげよう。魂の欠片を代償として貰うよ」

「本当か！ 代償はいいが、願いを叶えてからにしろよ」

「そう言うと思った。じゃあ、願いを叶えてからもう一度来るよ。その時に代償を貰うからね」

中川は半信半疑で頷いた。

鈴の音の様な笑い声を残し、鏡の中の悪魔は消えた。

そこはただの風呂場。

何の変哲もない、中川の家風呂場だった。

色の薄い血で描かれた魔法陣の様な物が残った鏡を見詰めていた中川は、頭を数回左右に振った後、鏡に水を掛けた。



数日後――。

夜勤明けの疲れた体をベッドで休めていた中川は外から聞こえた爆発音に驚いて飛び起きた。

「な、なんだ?!」

Tシャツ姿で窓に駆け寄った中川は見えた光景に呆然となった。

道路に十人以上の人々が倒れていた。

そして車が一台、自宅の塀に突っ込んでいた。フロント部分が完全に潰れて大破し、炎上していた。

「奈美恵!」

ライムグリーンの車は中川の妻が使っている車だ。

彼女は日勤で、定時であれば夕方に帰宅する予定だった。

時刻は午後6時30分を過ぎていた。

珍しく早く仕事を終えたのだろう。帰宅を急いだのだろうか。それにしても、妻が道路に居る人達を撥ね飛ばし、自宅の塀に突っ込むとは信じ難い光景だった。

「イヤァッ! 目を開けてえええ!」

「警察を呼べー!」

「救急車! 救急車を!」

「こ、子供がー!」

外に飛び出した中川の前には地獄絵図があった。

捻じ曲がった自転車や、血の付いたボール、ピクリとも動かない幼児、泣き叫ぶ乳児、呻き声を上げる女性……。

「こ、こんな事が……」

立ち尽くす中川の鼓膜を救急車やパトカーのサイレンの音が揺する。

悲鳴、叫び声、サイレンの音……。

現実を受け入れ難い中川には全てが耳鳴りの様に思えた。



一か月後――。

「山田さんのお宅に空き巣が入ったらしいわよ」

「え? また空き巣被害?」

「あの事故の後、本当に物騒よねえ」

「私が家を買った時、空き物件は5件だけって言われたけど、それ、売れてないでしょ?」

「売れるどころか、引っ越しちゃった人も居てあちこちに空き家があるから物騒で仕様が無いわ!」

「子供達が元気に遊んでいたのが嘘みたいね」

「煩かったけど、あれはあれで良かったのよ。いつも誰かが外に居てご近所みんなが顔を合わせてたから」

「そうそう。活気がある所には不審者って寄り付かないものね」

「もう、あんな風な明るい町にはならないのかしら？」

「無理に決まってるじゃない！ だって事故起こしたのはこの人よ。それもお酒飲んで、鬼の形相で道に居た人、全員を跳ねたんだもの。子供も赤ちゃんも関係無く！」

「同じ地域に加害者と被害者が居るなんてイヤよねえ」

「看護師さんだったんでしょ？ 仕事でイヤな事があったのか知らないけど、人を轢いちゃうなんてねえ」

「植物人間状態なんですって？」

「そうそう。あの事故の一週間後に旦那さんも車で単独事故起こして意識不明の重体ですって」

「あら、一昨日だったかしら？ 意識が回復しないまま……って聞いたわよ」

「怖いわねえ。あのお宅、幽霊屋敷だって噂でしょ？」

「お隣さん、怖がっちゃって引っ越すとか言ってたわよ」

「折角、買った家なのに、悲惨よねえ」



強く薔薇が香る日だった。

館のテラスで紅茶を楽しんでいるメフィストは口許に笑みを浮かべたまま庭を見詰めていた。

「ご機嫌だな、メフィスト」

「相変わらずおやつに敏感だね。今日のクッキーはバターの良い香りがするよ」

テラスにやってきたアスベエルに向かって笑ったメフィストは虹色に輝く珠を懐から取り出した。

「あ！ それ！」

「この前、人間界に召喚された時の戦利品。思いの外、沢山得られたんだ」

「う、わあ！ いくつ獲ったんだよ、魂の欠片！ ……すげえ。流石、悪魔だ」

「酷い言い方だね。確かに悪魔だけど、こういう事を望んだヒトの方が悪魔だと思うよ」

「……何を望んだんだ？ ソイツ」

「うーん、そうだねえ……。ヒトの存在意義を誤って解釈してた愚か者の話って所かな？」

「何だよ、それ」

「具体的に聞きたい？」

「……えーと、いや、いい。それより腹減ったからクッキー食わせて」

「そう言われると話したくなるね。クッキーは話し終わったらあげるよ」

「うわ！ 酷！」

「まあ、聞いてよ。私を召喚したのはね……」

ここは真紅の薔薇に包まれた悪魔メフィストフェレスが支配する館。

どんな望みでも叶えられる、悪夢に包まれた館。

気紛れな主は、気分次第でヒトの願いを叶えてくれる。

彼が「悪魔の笑み」を浮かべた時……

願いは現実の物と化す――。

例え、それがどんな願いであろうとも、望んだ者が予期せぬ形であろうとも、それは確かに叶えられるのだ。

――完――

<02> 49日目の嘘とホント

「今日からここが二人の家だよ」

メフィストフェレスがニコリと微笑んだ。

二人の少年、アスベエルとフェンリエルは顔を見合わせた後、恐る恐るといった様子で洋館の扉をくぐった。

館の奥へ入って行こうとしない二人の背後で、真紅の薔薇が咲き乱れる庭に囲まれた古い館の扉は勝手に閉じた。

驚き、警戒の表情を浮かべる二人にメフィストは優しい笑みを送った。

「大丈夫。酷い事はしないよ」

「.....その言葉を信じろって言うのかよ？」

「信じられないなら疑っていてもいいよ。でも、ひとつ条件を飲んで欲しいね」

「条件？」

フェンリエルを背に庇い、アスベエルは一步前を出た。墮天し、魔界の医師ラマンから実験動物として酷い扱いを受けた後では誰も信用できない。優しく接するメフィストの口から「条件」という言葉を聞き、やはり信用ならない、とでも言うかの如く、アスベエルは表情を曇らせた。

「この館では自由に過ごして貰って構わないけれど、悪魔として仕事をして欲しいんだ」

「仕事？」

「ここは通称『薔薇の館』と言う。魔界でも天界でも人間界でもない場所。時空の歪み.....狭間に建つ館とでも言ったらいいかな？」

「狭間？」

「時々ね、邪な望みを抱いたヒトが迷い込んで来るんだ。彼等の願いを悪夢の中で叶えてあげて欲しい」

アスベエルは目を丸くした。

「何で俺達が願いを叶えてやる必要があるんだよ！」

「別にタダで叶えてあげろ、とは言わないよ。目的は『魂の欠片』を手に入れる事なんだ」

「魂の欠片.....代償を貰うのか」

「そう。ちょっとした理由があってね。『魂の欠片』が要り様なんだ」

ヒトの願いを叶える代わりに魂を貰う。

悪魔らしいと言えば悪魔らしい。メフィストの目には妖しい輝きが宿っていた。

「ヒトに甘い夢を見させて魂の欠片を貰う。悪魔なら容易い事だろう？ 君達が集めた『魂の欠片』は私が貰う。賃料と言った所かな？」

どうだい？ と尋ねるメフィストに向かってアスベエルはコクリと頷いて見せた。特別、困るような条件では無い。

「ノルマは無いし、無理強いはしないよ。特にフェンリエルは無茶な事をしないで欲しい。いいね？」

アスベエルの陰に隠れていたフェンリエルは顔を少しだけ出してメフィストを見ると小さく頷

いた。墮天していながら清らかな天使であり続ける彼の存在は貴重であり、メフィストはそれを熟知していた。

「君達の部屋は準備してあるよ。キュリーとアリーに案内させよう。ああ、この館は生きていて悪戯好きだから注意してね。目的地があるなら、そこへ絶対に行く！ という強い意志を持っていないと『迷路に誘い込まれる』からね」

フフフと笑ったメフィストが館の奥を指さした。そこには可愛い少女の姿をした双子のインプが立っていた。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

双子のインプは声を揃えてメフィストを迎えると、アスベエルとフェンリエルに笑顔を向けた。

「ようこそ、薔薇の館へ！ 私達、使い魔一同、お二人を歓迎しますわ。お部屋に案内しますね。あ、もし宜しければお食事は如何ですか？ お茶も直ぐ用意できますわ！」

いつの間にか小さな悪魔達が二人の周りに集まっていた。インプや小悪魔達が二人の服を引っ張って館の中へ誘っている。

皆の歓迎を受けている二人の様子を笑顔で見た後、メフィストは一人で歩き始めた。

「ああ、集めた『魂の欠片』は数がまとまってから持ってくるといいよ。そうそう、ノルマは無いけどオマケが付くから覚えておいて」

玄関ホールを進んだ先、緩やかなカーブを描いた大階段を登りながらメフィストが言った。

「50日以内にヒト10人分の魂の欠片を集めたら、1人分プラスされるから頑張ってね」

「ひ、1人分がプラス？」

「魂の欠片10個じゃないよ？ 10人分。集めるのは結構大変だと思うけど、達成したら魂1人分がプラスになるんだ」

「な、なんだよ。そのシステム」

「でも、だからと言って無理する必要は無いからね。のんびり寛いで。この館の中に居る限り、二人の身の安全はこの私が保証するから」

含み笑いを漏らしながら手を振ったメフィストは廊下の向こうへ消えた。

主の姿が見えなくなると、玄関ホールは一気に賑やかになった。

立ち尽くす二人を、キュリーとアリー、そして小悪魔達が一斉に質問攻めにしたのだ。

いつ墮天したのか、名前は何か、メフィストフェレスとどういう関係なのか等、二人に向かって質問は無数に浴びせられた。

しかし二人は殆どの質問には明確に答える事ができなかった。二人共、未だ、自分達の状況を十分に把握できていなかった。

ただ、メフィストの言葉を信用するならこの館が天に見放された二人の新しい居場所であり、ここで悪魔として「魂の欠片」を集めるのが仕事という事は確からしい。

「行こうか、フェン」

「うん」

手を握り合った少年達は小悪魔達の輪の中で新しい確かな一歩を踏み出した。



「アンタの望み、叶えてやるよ」

慣れた口調でアスベエルは告げた。

今宵の来訪者は高校生のような。小太りでそばかすが目立つ少年はうつむき加減で、時折、視線だけを上に向けてボソボソと望みを口にした。

「……、……んだ」

「何？ 聞こえねえ」

「今度の間テスト……数学と物理と化学で学年トップになりたい」

「ふ～ん。それだけ？」

「それから……寺倉の奴を学年最下位に蹴落としたいんだ」

「同級生？」

「いつもいつも学年トップで偉そうな顔しやがる奴だ！ 澄ました顔で、いつも偉そうにしてて、生徒会長なんかやってるいけ好かない奴！」

「……カッコイイ成績優秀なクラスの人気者って所？ ソイツに勝ちたいんだ」

「それから……それから！」

「まだ望みがあるわけ？」

「立石ちゃんを……立石ちゃんを彼女にしたい」

どう見てもモテない容貌、サルの顔を横に引き延ばしたような顔の少年は顔を赤くしながら小声で言った。

「竹中高校のマドンナって言われる可愛い立石ちゃんを……寺倉の奴じゃなくて僕のモノにしたいんだ！ 永遠に！ この僕だけのモノに！」

「……………あっそ。妄想の中じゃなきゃ、無理だな。その願い」

憐れむように呟いたアスベエルは金瞳を輝かせ、背に負う蝙蝠の羽根をバサリと羽ばたかせた。

来訪者を招き入れた部屋が歪む。

真紅の薔薇の花びらが無数に舞い散り、時が止まる。

アスベエルが支配する部屋の中だけが夢の世界へ堕ちていく。

フェンリエルはそんな様子を離れた場所で見詰めていた。

「アス……無理し過ぎだよ」

不安そうに呟いたフェンリエルは緑瞳にうっすらと涙を浮かべて首を左右に振った。

墮天し、魔界の医師ラマンに拾われて様々な実験台にされていた日々から解放されてそろそろ50日になる。

正確には、この館に来て49日目だ。

メフィストとはよく顔を合わせるが、彼は特に何も求めて来ない。一緒に食事をしたり、談笑したりするだけだ。

フェンリエルはそんなメフィストに少しずつだが心を許していた。しかしアスベエルは妙に警戒心が強かった。

メフィストを信用していない、という態度を隠す事もなく、また、我武者羅に来訪者の相手をしていた。

まるでメフィストに対し「文句は言えまい」とでも言うかの如く「魂の欠片を集める」という仕事をこなしていた。

「身体を壊しちゃうよ。……僕の方まで働いてるんでしょ？」

寝る間も惜しんで悪夢に堕ちるアスベエルの体調が日々、悪化しているのは目に見えていた。フェンリエルが幾ら注意してもアスベエルは聞く耳を持たない。悪魔だから死にはしないだろうが、このままだとどうなるのか、フェンリエルは本気で心配していた。

「アァ……疲れた！」

フェンリエルが気を揉んでいる間にアスベエルは、またひとつ魂の欠片を手に入れた。一体、どれほどの数を集めたのだろう。

「フェン、待たせたな」

虹色に輝く小さな珠を手にしたアスベエルは悪夢から醒めた部屋で笑顔を作った。ベッドの上に座り、フェンリエルを手招きする。

「ねえ、アス。顔色悪いよ？ 大丈夫？」

「何だよ、毎度毎度！ 俺は平気だって言ってるだろ！ お前こそ、体、大丈夫かよ？」

「うん。僕は平気。でも、本当にアス、大丈夫？ そろそろ、ちゃんと休んだ方が……」

ベッドに上り、アスベエルの前に座り込んだフェンリエルはアスベエルの頬に手を当てた。アスベエルの顔は蒼白く見えた。

「うるさいなあ！ 大丈夫だって言ってるだろ！ それより、今の奴で魂10人分だぞ！」

「え?! ほ、本当？」

「多分だけど、きっと10人分になったと思う。妙なシステムらしいが、これで1人分得したぜ？ ざまあみろってんだ！」

フンと鼻を鳴らし、得意そうにアスベエルは笑った。

フェンリエルも笑顔を作ったが、何よりもアスベエルが心配でならない、という表情だ。

「少し休もう、アス。ここで僕と一緒に少しでいいから寝ようよ」

フェンリエルはそっとアスベエルの肩を抱いて横になった。無垢な緑瞳に見詰められ、アスベエルは文句を言うのを止めて小さく頷いた。

「ちょっと寝たらメフィストの所へ行くぞ。魂の欠片、突き付けてやるんだ」

「うん。解った」

素直に頷いたフェンリエルの答えに気を良くしたのか、達成感からか、アスベエルは大人しく横になって直ぐ寝息を立て始めた。

それを確認してからフェンリエルもウトウトと眠りに落ちる。

二人が静かな寝息を立て始めて数分後――

ゾワゾワと黒い影が壁を這い上がった。

それは部屋中を彷徨う様に這い回った後、二人が眠るベッドの前で止まった。

ズルズル、と何かを引き摺る様な音がした。

やがて赤く爛れた皮膚に覆われた巨大な蛙が現れた。体長二メートルはあるだろう。

全身が腐敗しているのか、形を保ったかと思えばボタリと皮膚が溶けて床に落ちる。異様に大きな目玉もズルリと落ちていて、数本の緑の血管で辛うじて体と繋がっている状態だ。

アンデッドの蛙が跳ねた。

ズズンッと地鳴りが響き、アスベエルとフェンリエルは飛び起きた。

「な、なんだ！」

「ッ！ アス、あれ！」

「何だよ、コイツ！」

悲鳴を上げる二人の目の前で、アンデッドの蛙が蠢いていた。

溶けて落ちた肉が床の上でシュウシュウと音を立てている。強力な酸なのだろう。焦げる様な酷い臭いがして煙が上がっていた。

「こ、こっち来んな！」

「アス！ あっちにも！ 部屋の入口にも！ いっぱい居る！」

フェンリエルが引き攣った表情で悲鳴を上げた。いつの間にか部屋中に蛙が満ち溢れていて、それらがジワジワと迫って来る。まるで二人を食らおうとでもいうかの如く、醜い舌を出したり引っ込めたりしている。

「に、逃げよう！」

「無茶だよ！ 逃げ場なんてねえよ！」

一匹の蛙が天井付近まで飛び上がった。

そして抱き合う二人の頭目掛けて落ちてくる。

「う、うわぁ！」

「畜生！ なんなんだよ！」

二人が成す術無く落ちてくる蛙の化け物を見上げていた時だった。

カッと部屋中が銀の光に包まれた。

余りの眩しさに二人が目を閉じた直後、部屋から化け物の姿が消えた。

「大丈夫かい？ 二人共」

穏やかな声が部屋に響いた。

そっと目を開けた二人の前に、優しく微笑むメフィストフェレスが現れた。

「メフィスト！」

「危なかったねえ。大丈夫だったかい？」

メフィストはそう言いながらベッドに歩み寄り、二人の頭をそっと撫でた。

「この館には沢山の悪魔が住んでいる。大抵は害の無い輩ばかりなんだけど。時々、厄介なのが現れる時があるから気を付けてね」

「ありがとうございます」

ホッとした表情でフェンリエルが言った。もし、メフィストが来なかったら今頃どうなってい

るのか想像しただけで身の毛がよだつ。

「それにしても、どうしてあんなに沢山集まったのだろうか？ 何か、悪魔を呼ぶような物を持っているのかい？」

メフィストが首を傾げて二人に尋ねた。メフィストの口調では、危ない悪魔が現れた原因が二人にある様だった。

「悪魔を呼び寄せるもの？」

「餌になるような何か。ああ、そうだ。『魂の欠片』を持っているんじゃないかい？」

「あ！」

メフィストの問いに対し、アスベエルは得意満面な笑みを浮かべた。

「集めてやったぜ？ 魂10人分！」

「10人分？」

「50日以内に集めたから1人分プラスで11人分だ！」

アスベエルがそう言うと虹色に輝く珠が無数に現れた。

これでどうだ、と言わんばかりのアスベエルと魂の欠片を見たメフィストはプッと吹き出し、ハハハハと声を上げて笑った。

「な、なんだよ！ 何笑ってんだよ！」

「アスベエル、もしかして本気にしたのかい？」

「はあ？」

「1人分プラスって、本当にそう思ったのかい？」

「え？ ま、まさか、嘘だったのか！」

アスベエルの顔が怒りで赤くなった。

「魂の欠片が増える訳ないじゃないか。勝手に増えてくれるなら苦労しないよ」

「だ、騙したのか！」

「私を信用していないようで、あの言葉は信じたんだ。可愛いね、アスベエルは」

メフィストは笑いながら両手をアスベエルの頬に沿え、金の瞳を覗き込んだ。

アスベエルの動きが止まる。

「館は悪戯好きだけれど、私も悪戯が好きなんだ。素直に騙されるなんてアスベエルは良い子だね。私はそんなアスベエルが大好きだよ？」

メフィストはアスベエルの額に口付けした。

小さなチュッという音がアスベエルの鼓膜を揺する。

再びアスベエルの顔が赤くなった。それは怒りではなく、羞恥の赤だった。

「嘘付き！ 覚えてろ！」

「怒らない、怒らない。ああ、魂の欠片は有り難くいただいておくよ」

「もう集めてやらねえからな！」

「う〜ん……。そうだねえ。ただ、魂を貰えばいいという訳でも無いから集めないってのもまあ、いいけど」

「へ？ 魂を貰うだけじゃ駄目なのか？」

「まあ、色々あるんだよ」

メフィストがフフッと意味ありげに笑った。アスベエルは馬鹿にされていると思ったのか、金瞳を吊り上げた。

「なんだよ！ 訳解んねえ！ もう、こんな所、出て行ってやる！」

「フェンリエルを連れて行く？ あっという間に墮天使達の餌食になるよ？」

「う……」

メフィストの言葉にアスベエルは声を詰まらせた。メフィストが居なければさっきの化け物から逃れる事すらできなかった。このまま館の外へ出たらどうなるか、火を見るよりも明らかだ。

「嘘を言ったのは謝るよ。でも、この館に居る限り、二人の身の安全は私が保証する。これは本当だよ」

メフィストはもう一度アスベエルの額に口付けしてから離れた。

「解ったかい？」

メフィストの問いにアスベエルは首を縦に振った。それを見たメフィストは踵を返した。

「キュリーとアリーにお茶を淹れて貰おう。庭を見下ろせるテラスで食事でもどうだい？ そうそう、集めている『魂の欠片』の事はそのうち話すよ。気が向いた時にでも、ね」

フェンリエルがアスベエルの手を取った。

アスベエルは素直に立ち上がり、ベッドを降りた。

メフィストが先を歩き、二人は後に行く。

49日目にして判明したメフィストの悪戯と保証。

二人は明るい声でメフィストに抗議しながら館の廊下を進んで行った。

—完—

僕のコンプレックスは内気な性格。

自分に自信がなくてなかなかクラスの輪に入っていけない。中学ではずっと一人だった。

このままじゃいけない、と思って高校でバスケットボール部に入った。

と言っても選手にはとてもなれないのでマネージャーだ。

毎日、毎日、ボールを磨いたり、洗ったビブスを畳んだり、コートにモップを掛けたり、レギュラーメンバーのスコアをチェックしたり……。

中学の時に比べると随分充実した学生生活になったと思う。

それに、人と話したり、クラスの活動に参加するのに抵抗がなくなった。

少し成長できたと思う。

でも……別の問題が出て来た。

僕の変な癖が判明したんだ。

それは……スポーツができる男子が好き、というもの。

特に高校三年生のキャプテンに胸がときめくという困ったもの。

身長186cm、ポイントガードを務める瀬川先輩はいわゆるヘビ顔と言われるタイプだけど、鋭い感じは少なく、若干垂れ気味の目が印象的だ。

コートの中ではいつも全体を冷静に見詰めていて、どこにボールを入れれば得点できるか正確な判断を一瞬で下す事ができる。

カウンター攻撃された時は優しい顔に鋭さと独特の怖さが浮かぶけれど、素早く身を翻してディフェンスに走る姿は僕の心を掴んで離さない。

チームが負けている時は冗談を言ったりしながらメンバーを鼓舞するし、勝っている時は自信過剰とも思える台詞で皆をその気にさせる。

正にキャプテンの鏡と言える人。

当然のように女子のファンは多い。

練習試合だって親衛隊が現れるし、試合の前後には必ず差し入れの山ができる。部室にも女子が訪ねてくる事があるし、告白されているのも見た事があった。

そんな女子達より僕は断然、先輩の近くに居られる。

汗が匂う距離で話をする事だって僕には可能だ。

この何とも言えない優越感が堪らない。

でも……。

僕がどんなに想ってもそれは一生片思い。

恋愛という試合では、女子が相手だ。絶対勝てない勝負だった。

虚しい優越感に浸りながら、瀬川先輩が使ったビブスを抱きしめるのが関の山だった。

「健気と言うか、愚かというか。何とも切ない恋だね」

その人は突然現れた。

部活後、皆が帰って空っぽになった部室を掃除していた時だった。

閉めていたはずの部室のドアが開いていて、銀髪が綺麗な男性が立っていた。

投げ掛けられた言葉の意味が解らなくて僕は困惑顔になった。それを見た男性はニコリと笑った。

「もう10月だ。瀬川先輩は高校三年生。ウインターカップもあるけど、そろそろ大学受験に本腰を入れるんだらう？」

「え?!」

男性は初めて見る顔だ。

それに、服装や雰囲気から学生ではないように思える。では、先生か? いや、臨時の先生も含めて見覚えの無い人だ。

だとすると部外者という事になる。でも、部外者がどうして僕や先輩の事を知っているのだらう?

「あ、あの……貴方は？」

「そうだね、私は占い師……みたいなものかな? ちょっと変わった占い師？」

「占い師？」

占い師と言えば、水晶の珠なんかを持った、怪しい服装の女性を思い浮かべるが、そんな胡散臭さは無い。背が高く、銀髪がサラサラと綺麗に揺れる、不思議な瞳の色の男性だ。僕の好みではないけれど、ハンサムでイイ男だと思う。

「今のままだと、君と瀬川先輩の関係はもうすぐお終いになるね」

「……僕が何かしてもきっと無駄です」

「どうしてそう思うんだい？」

「先輩、夏の試合の後、彼女ができたみたいですから」

「女が相手だと勝てない？」

クスクスと男性が笑った。何を言ってるのだらう。そんなの当たり前だ。

「女は怖いよ。化けるし騙す生き物だ」

「騙す……？」

「スポーツは常にフェアで、正々堂々と戦えばいいけれど恋はそうではないからね。君の大切な先輩の彼女はどんな子だらうね？」

意味深な笑みを残し、占い師と言った男性は姿を消した。

フッと蠟燭の火を吹き消したみたいに姿が消えた。

ただ、ドアは開きっ放しになっていたからそこに男性が居た事は確かだと思う。

「先輩が……騙されている？」

僕の胸がゾワゾワと騒ぎ始めた。

先輩の彼女はかなりの美人だと聞いた。高校二年生で学年一の美人らしい。親衛隊に居た子ではなく、先輩をずっと追い駆けて来たような子でもないとの事だ。でも、それ以外の事は知ら

ない。

「女は騙す……」

それは確かだと思う。

僕は中学の時、何度も女子に騙された。告白されてデートに誘われた、と思ったらグループ交際のデートに同行させられ、レストランの席取りやショッピングの荷物持ちをさせられた。

「断る訳ないよね」と半ば強制的に連行され、最後に「告白を信じて付いて来るなんて馬鹿だよ」と言われるのがオチだった。

そんな酷い女は一人や二人じゃない。

もし、先輩がそんな女を彼女にしているとしたら……。

「そんな女に、僕は戦わずして負ける？ 中学生の時みたいに……僕はまた、あの時みたいな惨めな想いをする？」

ザァッと秋の風がドアの向こうを吹き抜けていった。

■□■

僕は時間を見付けて瀬川先輩の後を追う事にした。

マネージャーとしての仕事はこれまで通りにこなし、宿題や試験勉強もおろそかにしない。

でも、やっぱり先輩の事が心配でバレないように先輩の様子を窺う事にした。結構、難しかったがスリル満点だった。それに先輩の為だと思えば苦労は感じなかった。

先輩は部活の前、少しの時間だけ彼女と過ごすのが日課だった。やっぱり大学受験を控えているからか、部活後は真っ直ぐ帰宅していた。彼女も帰りが遅くなるのを避けているのか、遅くまで待っている様子はなかった。

「……美人で真面目な良い子みたい」

ちょっとガッカリした。

あの占い師が言った様な人を騙す様な女子ではない様だ。それだと僕の完敗確定だ。

だが……。

ある雨の日、僕が体育館でボール磨きをしていると彼女が携帯で喋りながら歩いているのが見えた。多分、部室に向かった先輩と分かれた後だと思う。

「え？ それいいじゃん！ 臥梁高校のバレエ部と合コン？ 行く行く！」

僕は耳を疑った。廊下を歩いて行くのは確かに瀬川先輩の彼女だ。でも、確かに「合コン」と言った。

「大丈夫だよ。アイツはカッコイイしバスケ部のキャプテンだし頭も良くて理想の彼氏って感じけどもう直ぐ別れる。え？ だって、大学受験するんだよ。そしたら会えなくなるしー。クリスマスまでじゃない？ 精々ウィンターカップまで？」

彼女は凄く楽しそうに話していた。先輩にはとても聞かせられない酷い言葉を平気で吐いている。

「女子ってさあ、ダイヤの原石でしょ。男はそれを磨く研磨剤って感じ？ イイ研磨剤を沢山見

付けて利用して、どんどん綺麗になっていくの。アイツは結構イイ研磨剤なんじゃない？ え？
酷いって？ そんな事ないってー！ 皆そうでしょ？ まさか、最初に付き合った男子と一生一緒に居るつもり？ そんなのアリエナイし」

呆気にとられている僕の前から彼女は消えた。

でも、彼女の笑い声と甲高い声が僕の耳の奥で幾重にもこだまする。

先輩の彼女の背中、かつて僕を騙した女子の背中と全く同じだった。

「このままじゃ……先輩が傷つく！ 大事な試合の前……いや、一生を左右する大学受験の前に……。そんな、そんな事……」

■□■

「先輩！ 彼女と……彼女と別れてください！」

「？ どうしたんだよ、急に？」

ウォーミングアップが終わり、今日の練習メニューを確認に来た先輩に僕は叫ぶように言った。

「どうしたって……だって、その……」

「女に現を抜かすんじゃないくて、ウインターカップに集中しろって、マネージャーとしての忠告か？」

先輩はハハハッと笑った。僕の言葉を本気にしていない顔だ。

「そ、そうじゃなくて……先輩、騙されているんです」

「騙されてる？」

「あの彼女は……先輩と付き合いながら合コンに行ったり、他の男子を物色したりするような酷い女なんです！」

「へえ！ そいつは知らなかった。お前、アイツの事、よく知ってるなあ」

「ほ、本気にしてませんね！ 僕、僕、聞いたんです。あの彼女が友達と電話で話しているのを！ 先輩の事、これっぽっちも好きなんかじゃないって聞いたんです！」

僕は必死に訴えるのに、先輩はボールを指先で回したりしながら笑っていた。

「あんな、あんな酷い彼女と早く別れてください！ 先輩の為になりません！」

「そうかあ。俺の為にならないのか。じゃ、誰と付き合えば俺の為になる？」

「え？」

「どいつと付き合えばいいと思う？ マネージャーとして分析してくれよ。ウインターカップと大学受験を控えた、キャプテンの俺はどんな奴と付き合えばいいんだ？」

先輩の顔が近付いて来た。何だか意地悪い笑みを浮かべている。

僕が答えに困っていると先輩が僕の耳に囁いた。

「オマエが俺の彼女になるか？ 俺がどうすれば良い結果を得られるか。マネージャーとして分析して、常に俺をベストの状態にするよう尽くしてくれる？」

「せ、先輩……。ほ、ぼく……！」

「それなら俺、彼女と別れてもいいな」

「先輩！」

目覚まし時計のベルが聞こえた。

ガバリと起きた僕の目の前に見えたのは母さんの顔だった。

「何、寝惚けてるの？ 今日も朝練に行くんでしょ？ 早く起きて準備しないと間に合わないわよ」

「ゆ……夢か」

「ほら、急ぎなさい」

部屋から出ていく母さんの背中を見送った僕はハーツと溜息を吐いた。

「夢だよ。うん。先輩が僕に告白してくれるなんて……」

現実にはあり得ない。何て奇妙な夢を見たんだろう。

僕は首を左右に振ってベッドから降りた。

「その夢、叶えたいと思わないかい？」

「え?!」

また突然だった。

今度は僕の学習機の椅子に占い師と言った男が座っていた。

「先輩から告白を受けてイイ仲になって、一緒に試合も受験も頑張る。そして素敵な結果を得る……夢にしておくには勿体無い望みだね」

クスクスと笑いながら男は僕に訳ありな視線を送って来た。

「そ、それは、そのお……叶ったら夢みたいな話だけど……」

「望んでみる？ 先輩とイイ仲になるのを」

「う……」

頭がクラクラした。

思い上がりと思われるかもしれないけれど、あんな彼女より僕の方がずっと先輩に相応しいと思う。ただ、性別が問題だ。

「愛があれば男も女も関係無いんじゃないかな？」

「そ、それは……その……」

「私ならその夢、叶えてあげられるよ」

「ほ、本当！」

「本当だとも。それを望むかい？」

薔薇の花びらが部屋中に舞った。どこから現れたのか解らないが、真紅の花びらだった。占い師と言った男が舞い散る花びらの中心に居た。

嫣然と笑う男が手を差し伸べて来た。多分、その手を取れば願いが叶う。そう思った。

僕は一歩前に踏み出した。

腕が勝手に持ち上がっていく。

「ぼ、僕は……」

フラフラとソッチへ歩き始めた僕の耳に突然、甲高い声が刺さった。

「早くしなさい！ 母さん、今日はいつもより早く仕事に行くんだから！」

「は、はい！」

僕の意識は現実に戻された。

ハッとした僕は一人で部屋に居た。

薔薇の花びらなんて無いし、男も居ない。

「夢……」

気を取り直した僕は部屋を出て階段を駆け下りた。

■□■

毎日が忙しく過ぎ、ウインターカップも初戦敗退という残念な結果で終わってしまった。

悔し涙を皆で零し、寒い空の下でリベンジを誓ったのが一週間前だ。

新年を迎えて高校三年生の先輩達が退部を宣言し、人数が減った少し寂しい部室を僕は掃除していた。

「西野！」

「はいっ！」

突然、名前を呼ばれて僕は箒を持ったまま飛び上がった。

「せ、瀬川先輩！」

部室の入口に瀬川先輩が立っていた。ジャージ姿ばかり見ていたから学ラン姿が妙に新鮮だった。

「忘れ物ですか？」

「いや、ちょっと、な」

先輩が言葉を濁した。頭の後ろを掻きながら、何か言い辛そうな様子だ。

僕は胸が高鳴った。

お互い、何も言わない短い時間が過ぎた。

先に口を開いたのは先輩だった。

「一年間だったが世話になった。部室の掃除、備品の整理なんかを文句も言わずに真面目にこなす、お前みたいなマネージャーはなかなか居ない。これからもバスケット部の為に頑張ってくれよ」

ちょっと照れくさそうに先輩は言うと言を差し出してきた。握手を求めてきた、と解って僕は体中が熱くなるのを感じた。

「い、いえ！ 僕みたいなマネージャー、皆さんに迷惑ばかり掛けたんじゃないかって……」

「そんな事は無い。コーチもお前の几帳面な態度を評価してたぞ」

僕は手をズボンで拭いてから差し出した。先輩が力強く握ってくれる。

「俺達はウインターカップ初戦敗退だったが、次は頑張ってくれ。今の二年をお前がしっかり支えて勝たせてやってくれよ」

「が、頑張ります！」

先輩は力強く頷くと手を離した。そして感慨深そうな顔で部室を眺めている。

多分、これが先輩と話す最後のチャンスになる。

僕はそう思った。

ずっと胸に秘めていた思い。それを伝えるなら今しかない。

戦わずして負けるか。それとも、酷い女子に勝負を挑むか……。

僕は中学の時のままの僕か。

否、僕は自分を変えたくてバスケットボール部のマネージャーになった。

そして僕は変わったはずだ。

さっきの先輩の言葉を信じるなら、人に頼られる男子になったはずだ。

もう、記憶の中のあの日のような情けない僕のままじゃない。きっとそうだ。自信を持っていると思う。

今、ここで何も言わなければ、あの日と同じ、古い記憶の自分と同じ自分であると認めてしまう気がした。

だから僕は口を開いた。強い意志を胸に、想いを吐き出した。

「先輩！」

自分が使っていた棚をポンッと叩いて去ろうとした先輩を僕は呼び止めた。

先輩が振り返った。

少し垂れ気味の優しい目に僕の姿が写っていた。

「先輩……」

「何？」

「ぼ、僕……。僕は先輩の事が好きでした！先輩の一生懸命な姿を見るのが僕の楽しみでした！彼女が出来たと聞いて本当に残念でしたけど、それでも僕は先輩が好きでマネージャーを続けてきました！」

言い始めたら止められない。最後まで一気に言ってしまおうしかない。

「ウインターカップは残念でしたけど、先輩の試合運びは素晴らしかったと思います。しっかり記録を取りました。次の試合に向けて分析して必ず役立てます。マネージャーとしてこれからも頑張ります。先輩、大変お疲れ様でした！大学受験頑張ってください！先輩なら必ず京大、受かると思います！卒業式では良い結果に喜ぶ先輩の顔を見られると信じています！こちらこそ、大変お世話になりました！本当にお疲れ様でした！」

言い終えた時、僕の心臓は今まで経験した事が無いくらい早く拍動していた。

多分、僕は怖いくらいの真顔だったんだと思う。

吃驚した表情の先輩は暫く何も言わなかったけれど、プッと吹き出すと大声で笑い始めた。

「せ、先輩？」

「アハハハハ！お前、そんな事言う奴だったんだ。なんだか意外な西野の姿見たな」

「す、すみません。突然、変な事言って……。忘れてください」

僕は真っ赤になった顔を先輩に向けていられなくて俯いた。

「いやぁ、試合に負けるし、彼女にフラれるし、年末に受けた模試の点数が悪くて落ち込んでた

んだけど、ここに来て正解だったな」

「え？」

「お前はいいマネージャーだ。彼女になって欲しいくらいだよ」

「！」

先輩はハハ、と笑うと手を振って部室を出て行った。

「今の告白で元気が出た。絶対、京大に受かってみせるぞ。卒業式で会おうな！」

「は、はい！」

先輩の明るい言葉が僕の胸に染みた。

多分、僕は勝ったんだと思う。

あの女子に、きっと僕は勝てた。

■□■

「なあ、メフィスト」

だるそうな声がメフィストフェレスを振り返らせた。

ソファにだらしなく座った金瞳の少年が唇を尖らせていた。

「不甲斐ないんじゃないの？ 何でもっと誘惑しなかったんだよ」

「うん？」

「強く誘惑すりゃ、アイツ、墮落して先輩と色々やっちゃう夢見て魂の欠片を差し出したんじゃないの？ なんだか、青春真っ只中の少年の背中を押して応援したみたいじゃん」

「そうだねえ……。まあ、そういう事があってもいいんじゃない？ 必ず墮落させないといけない訳じゃないし」

幻惑の悪魔メフィストフェレスらしからぬ台詞に金瞳の少年アスベエルは目を見開いた。

「何だよ、人間に味方するのか？」

「気紛れなんだよ、私はね」

薔薇の花びらを浮かべた紅茶を口にしながらメフィストはフフッと笑った。

「悪魔だって時にはイイ事をするんだよ。悪魔にとってイイ事を、ね」

「え？」

「先輩は卒業式までマネージャー君の言葉を支えに頑張ると思うよ」

「そーだろーね」

「必死に勉強して第一志望に受ければ、どうだ、という顔で卒業式に出るだろうね」

「それが？」

「そこでマネージャー君に再会したらどんな気持ちになると思う？」

「さあ……」

「そこを上手く誘惑したら、二人同時に墮とせるんじゃない？」

「あ……」

フフフとメフィストは笑った。

「気が向いたら……だけどね」

「ひっでえ……悪魔！」

薔薇の館……

そこに住まう幻惑の悪魔メフィストフェレスはとても気紛れ。

その幻惑に酔うか否か、それは貴方次第……。

—完—